

上野のにぎわいに関する歴史的考察
—各時代の文学から読み取ったハレとケの場のうつろいを手がかりとして—
A Historical Study on the Prosperity in Ueno
-Using Changes of the Places of Hare and Ke Extracted from Literatures of Every Era as Clues-

56135 江口 久美

Recently, with internationalization and information of Tokyo, the unique city making that revives culture and history is needed. Prosperity is an important element that brings the city prosperity.

This study focuses on Ueno, which has been popular since Edo era and still succeeds that prosperity. This study reveals how prosperity in Ueno is historically succeeded and changed, and consider that reason and influence.

Unique Japanese prosperity has its origin in temple festival, and that essence is in changes of the places of Hare and Ke. So it can be said that the existence of the places of Hare and Ke is necessary for prosperity.

The method of study is as follows. At first, I use the map and research the characteristics as the place of Hare. And then, I use literatures and extract activities, routes and view descriptions of Hare.

Finally, I found the conclusion. The essence of prosperity in Ueno is in mixed existence of Hare and Ke that is created in differentiation and diversion of Japanese-style quality of Hare with the space in urban formation after the modern age, having its origin in space structure of the mountain and the town; Kaneiji and Monzenmachi. And I got the suggestion as follows. To create prosperity in the city, scatter selectable places of Hare in the area and create the mix of diverse activities.

序章 研究の背景と目的

0-1 研究の背景と目的

研究の背景

近年、東京の国際化、情報化に伴って、文化や歴史を活かした個性ある都市づくりが必要とされている。東京の都市の文化的な要素には様々なものがあげられるが、にぎわいという要素は、その中でも都市に活気をもたらすうえで重要であり、かつ具体的に捉え難い要素であるといえる。

都市のにぎわいが存在していると、そこは繁華街と呼ばれる。すなわち、栄えているまちということである。現在、東京に存在している繁華街には、大きくわけて2つの系譜がある。一つは、江戸時代から続くもので、上野・浅草・芝等があげられ、もともと寺社の門前町に端を発したものである。もう一つは明治以降から続いて来たもので、渋谷・池袋・吉祥寺等があげられ、鉄道会社による開発等によって新たに生まれてきたものである。

まず、江戸時代から続く繁華街の殆どが門前町であった理由は、日本の都市の歴史的な背景による。江戸時代、江戸は幕府によって各町の用途が規定され、人々はそれに従って生活しなくてはならなかった。また、公共的に設けられた、江戸の人々のための憩いや娯楽のための空間はほとんど存在せず、唯一存在したものは、寺社空間であった。寺社空間の前には、門前町が形成され、寺社の周辺では、寺社と門前町が一体となった、にぎわいが形成されていた。

その後、明治維新による近代化を経て、時代が進むにつれて、都市をとりまく環境に変化が起こっていった。すなわち、鉄道の発達によって、東京の都市構造に大きな変化が起こった。人々の住む場所も拡大し、繁華街も、新たに企業によってつくられた原宿や渋谷等に代表される様に、そののにぎわいの場所を移していった。

そうした新興の繁華街がにぎわっていくなかで、古くからの門前町をベースとしたにぎわいは、急速にその地位を落としていくものも多数あらわれてきた。

上野公園は、太政官布達により指定された、最初の五公園のひとつである。上野公園は、寛永寺境内であった時代から、桜の名所としてにぎわいをもち、広く庶民に親しまれてきた。太政官布達により公園に制定された後、国家の威光を発現する場所として、博覧会が行われるなか、文化の森として、大学・博物館などが建設されてきた。その間、不忍池が競馬場として利用されることもあ

るなど、各時代において様々に新たなにぎわいが作り出されてきた。また、それら博覧会のイベントの影響等をうけて周辺のまちのにぎわいも、形を変えながらも継続され、現在のにぎわいの骨格を目に見えないながら形づくってきた。

研究の目的

本研究は、江戸時代から名所として親しまれ、現在もそののにぎわいを継承している上野を対象とする。現在のの上野におけるにぎわいが、歴史的にどのように継承され、また、どのように変質してきたかを明らかにし、その理由と影響を考察する。以上のことから、東京における都市づくりにおけるにぎわいの創出の仕方において、示唆を得ることを目的とする。

0-2 研究の視点と方法

研究の視点

にぎわいとは、人出の多い活気である。

日本独特のにぎわいは、寺社のお祭りににぎわいに由来するものであり、ハレとケの場のうつろいとその本質となっている。

そこで、ハレとケの場の存在がにぎわいにとって不可欠であると言える。また、ハレの場の存在によって、表裏一体であるケの場も存在していると言える。

つまり、江戸期に端を発する門前町のにぎわいを現在も継承している上野は、ハレとケの場のうつろいをその根底に有していると考えられる。

そこでまず、ハレとケの定義について、ここで述べておきたい。一般的な見解によると、ハレは非日常、表立ってはなやか、正式・公式、晴れがましい場であり、儀礼や祭り等がそれに当てはまる。また、以上のことから、時間的もしくは空間的に限定された場だと言うことができる。反対に、ケは改まっていない日常的、普段、平生の場であり、ふだんの生活である。

そこで、ハレの場とは、時間的もしくは空間的に限定された、公式で、晴れやかな、日々の生活の為の行動ではない、特別な行動をする場、と定義する。例えば、お祭り、花見、誕生会、家族での記念撮影等が相当する。また、反対にケの場とは、ハレ以外の場であり、日常的な場である。

研究の方法

実際の空間に関しては、まず、上野の山と不忍池は、その歴史的背景からほとんどの時期においてハレの場として使用されてきたので、平面図、文献等を用いて、空間構造の変遷を追う。

まちに関しては、住宅地図、台東区史等を用い、主要なまちの変遷の様相と大きな変化、主要な集客施設等を追う。

以上から、9 のエリアに分け、ハレの舞台としての上野の可能性を明らかにする。

以上を踏まえた上で、ハレの場としての上野の実際の利用の状況を探る。各時代における文学を用いて、ハレとケのアクティビティの利用を明らかにする。

まず、アクティビティを抽出し、明らかになった舞台において、どこで、ハレとケの行動をしているかを明らかにし、各舞台の使用状況を明らかにする。

次に、ルート抽出し、ハレの舞台の一体性を探る。また、風景描写から、そのルートの一体性の認識を確認する。

文学に関しては、榎田満文による東京記録文学事典と台東区立中央図書館の台東区ゆかりの文学コーナーから、上野を舞台とした代表的な文学を抽出した。江戸期に関しては、江戸名所図會を用いた。

時代区分は、上野公園の用途から、江戸期、明治期、戦前（大正から終戦まで）、戦後（終戦から昭和 50 年代まで）とした。



図1 時代区分

0-3 対象地について

研究の対象としては、いわゆる上野とよばれる、上野公園と周辺市街地を対象とした。上野公園は、太政官布達によって指定されたわが国最初の公園であり、400 年以上におよぶ歴史の中で栄枯盛衰を経験してきた歴史・文化の豊かな公園である。かつては、寛永寺として歴史的空間、市民の景勝地として親しまれていた。また、周辺のまちは門前町や闇市、その後のアメ横等上野公園と一体的に上野という地域としてにぎわってきた。



図3 対象地

0-4 既往研究

にぎわいに関する研究
にぎわいを非常に大きなスケールで捉えた研究・・・金

による、ソウル市の通りの都市空間の役割を、資料を通じて明らかにした研究等。

街路や店舗といった固定的な施設に着目した研究・・・橋本による、にぎわいのイメージを構成する要素とその関係に関する研究等。

露店等の仮設空間に着目した研究・・・志賀らによる、ソウル市の歩道における露店占有の実態から賑わいを明らかにした研究等。

にぎわいを構成する人に着目した研究・・・鍛らによる、人間と環境の関係を定量的に記述した研究。

ハレとケに関する研究

西田による、京都御苑の計画原理に関して、ハレとケという観点から、普遍部分と可変部分の共存を明らかにした研究等。

上野の空間構造に関する研究

小野による、明治期の造園空間の計画思想を明らかにする上で、国家的催事空間としての上野公園の空間を分析した研究等。

文献から都市を読む方法論に関する研究

進士らによる、東京日日新聞から、震災復興公園に関する市民の反応や専門家の評論を明らかにした研究等がある。

本研究の新規性は、にぎわいを都市空間におけるハレとケの場のうつろいという視点から明らかにする点にあると言える。

第1章 上野の地域構造の歴史の変遷

1-1 緑地の歴史の変遷

周辺の緑地は大幅に減少している。その為、上野公園のみが主な緑地として残されている。

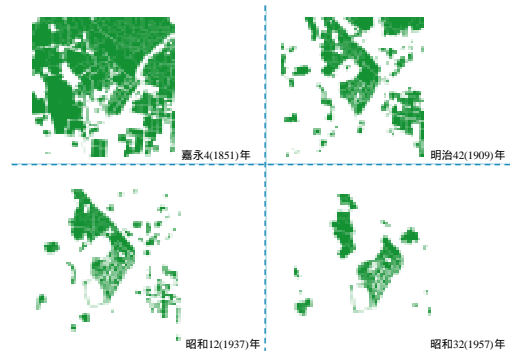


図4 緑地の変遷

1-2 河川の歴史の変遷

細かな水網は消失し、不忍池のみ残された。

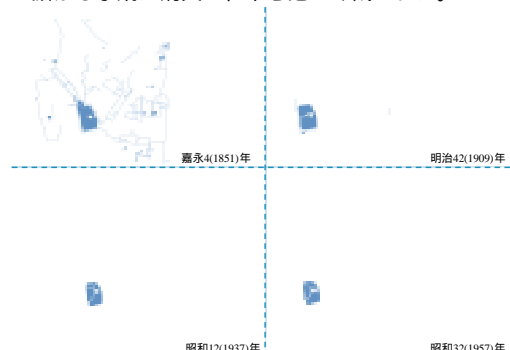


図5 河川の変遷

1-3 道路の歴史の変遷

周辺の街区は細かく市街地化が進み、不忍通りと昭和通りが大きく発達した。

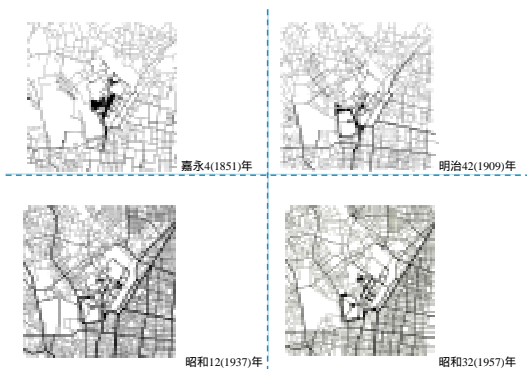


図6 道路の変遷

1-4 鉄道の歴史的変遷

JR が大きく発達し、路面電車も細かく発達した。

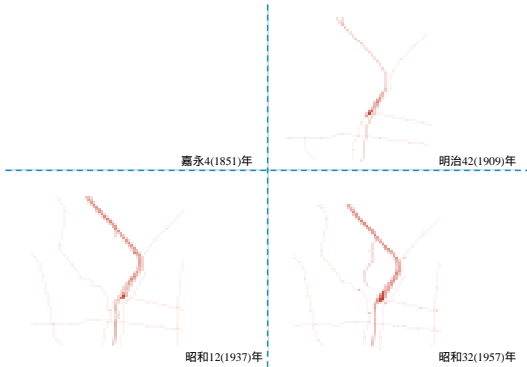


図7 鉄道の変遷

第2章 江戸期の寛永寺と門前町

2-1 境内の空間構造

寛永寺の成立

江戸城の鬼門を守護するため、天海上人が寛永2(1625)年、天台宗東叡山寛永寺を建立した。江戸城の北東に位置し、南西を守る増上寺と対になっている。

風水による場所の選定

四神相応の地として選ばれた。すなわち、北部に玄武の丘陵として上野の山が聳え、東部に青龍の流水として子院脇の水路が流れ、南部に朱雀の汚地として不忍池があり、西部白虎の大道として谷中に至る道がある。

江戸における京都

江戸における京都を作り出すように計画された。すなわち、上野の山が比叡山、不忍池が琵琶湖、中之島が竹生島、大仏が京都の大仏、清水堂が清水の舞台に対応する。

御成道と軸

寛永寺は幕府を庇護する為、江戸城の方向、御成道と沿った方に伸びる軸を有する。

江戸の都市構造との関係

通常は、参道に対して門前町、子院、境内という空間の連続を持つが、寛永寺においては門前町、境内となっているため、珍しく、聖と俗の空間が直接面する構造となっている。

境内の軸線

江戸城に向けた軸から、境内の大きな軸が定められた。東照宮と弁財天の軸は、東に向けられた。本坊の背後に位置する霊廟も、微地形を生かし、江戸城を向く形の軸を持った。

寛永寺の領域

橋、門、水路を境とし、更に地形を生かして、空間のヒエラルキーがつけられた。第1の領域には、庶民が入れ、子院が並んでいた。第2の領域には本坊があった。

第3の領域には霊廟があった。

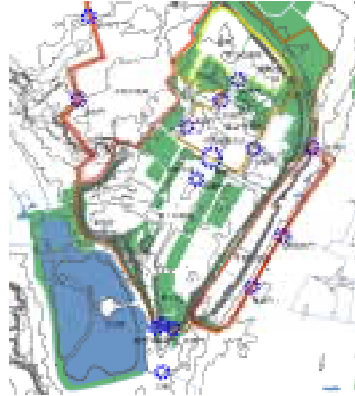


図8 寛永寺の領域

2-2 まちの変遷

二度の大火(明暦の大火、元禄の大火)を経て、その後大きく門前町として発展した。その際に、火除け地として設けられた場所がにぎわいの創出に大きく貢献した。江戸期において、最も繁華なところは池之端仲町であった。

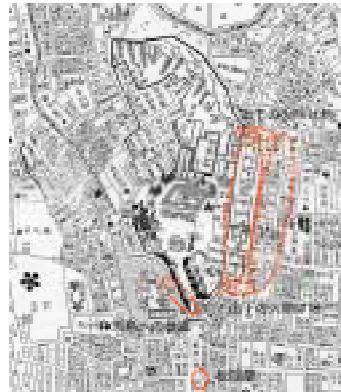


図9 江戸期のまち

2-3 人々の行動

アクティビティ(花見時)

ハレの舞台として用意された上野の山において、メインのハレのアクティビティを行い、その他、ハレがにじみ出した舞台で付随するアクティビティを行っている。



図10 江戸期のアクティビティ(花見時)

アクティビティ(平常時)

不忍池のみが舞台として残り、そこを中心にハレのアクティビティが存在するものの、ケのアクティビティはそれと少し関連する形で現れている。



図 11 江戸期のアクティビティ（平常時）

風景描写

近景にまち、中景に不忍池畔の様子が描かれ、その背後に上野の山までが描かれており、上野の山と一体性を持ったアクティビティの舞台であることが読み取れる。

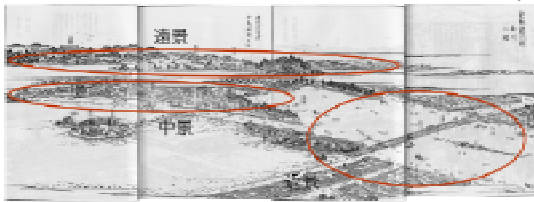


図 12 東叡山黒門前

第3章 明治期の博覧会とにぎわいの拡大

3-1 公園内の空間構造

戊辰戦争で寛永寺境内は荒廃した。その後、明治6(1873)年、太政官布達により上野公園に指定され、博覧会の時のみ、寛永寺の空間構造が再現されるようになった。



図 13 第3回内国勸業博覧会

図 14 明治44年の上野公園

3-2 まちの変遷



図 15 明治期のまちの主な施設

幕末からの下谷芸者の出現は、広小路の西側を引き続き繁栄させた。また、明治15(1882)年、上野駅が開設された。この時期、まちに現れた新たな集客スポットは、勤工場や牛肉や等、広小路を中心に展開していた。

3-3 人々の行動

名称	著者
鶯亭金升日記	鶯亭金升
残されたる江戸	柴田流星
百八の鐘	高浜虚子
半日ある記	寺田寅彦
曇天	永井荷風
野分	夏目漱石
虞美人草	夏目漱石
十三夜	樋口一葉
浮雲	二葉亭四迷
不忍十景に題す	正岡子規
東京見物	藪野椋十
雁	森鷗外
学海日録	依田学海

表 1 明治期の文学

アクティビティ（博覧会時）

江戸期を継承したハレの舞台に広小路と駅が加わり、そこで江戸期よりも多様なアクティビティが行われるようになった。



図 16 明治期のアクティビティ（博覧会時）

アクティビティ（博覧会時以外）

広小路と駅が、まちのハレの舞台として成立している中で、上野の山と不忍池を中心に多様なアクティビティが行われている。



図 17 明治期のアクティビティ（博覧会時以外）

ルート・風景描写

藪野椋十「東京見物」より

池之端から会場に至るまで、期待にあふれて博覧会場に向かう描写がされており、にぎわいの領域の段階的な連なりを見ることができる。

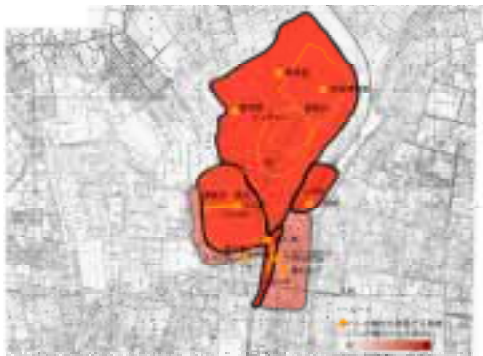


図 18 東京見物のルート

第4章 戦前の公園とまちのにぎわいの融合

4-1 公園内の空間構造

大正 13(1924)年、上野公園は東京市に下賜された。その際に、宮内庁は下賜後の管理について条件をつけた。その為、下記図面のように固定施設が創られ、寛永寺と同様の空間構造が恒久的なものとして設置された。



図 19 戦前の上野公園

4-2 まちの変遷

震災後、広小路の東側に人通りが多くなった。デパートが急速に発展し、松坂屋のある東側が発展した為である。また、国電山手線が循環線となり、御徒町駅の建設に伴って、東側の歩行人口が増加した点もあげられる。西側においては、花柳界が衰退した。



図 19 戦前のまちの主な施設

4-3 人々の行動

表 2 戦前の文学

名称	著者	名称	
三百年の夢	宇野浩二	出世	菊池寛
悪魔の紋章	江戸川乱歩	受験生の手記	久米正雄
陰獣	江戸川乱歩	下谷生れ	小島征二郎
黄金仮面	江戸川乱歩	東京今昔記	サトウ・ハチロー
怪人二十面相	江戸川乱歩	ちんちん電車	獅子文六
少年探偵団	江戸川乱歩	震災日誌	染川監泉
妖虫	江戸川乱歩	柳湯の事件	谷崎潤一郎
兎の挽歌	円地文子	バラック生活者を観て	徳田秋声
鷲亭金升日記	鷲亭金升	震災画報	宮武外骨
雛妓	岡本かの子	抒情小曲集	室生犀星
上野桜木町	尾崎一雄	浅草私塾記	安川茂雄
大正の下谷っ子	鹿島孝二	美術院の会場で	山本鼎
上野・浅草	勝本清一郎	路傍の石	山本有三
ガンバルおじいさん	金津武夫	旅愁	横光利一
地下鉄道見参記	上林暁		

アクティビティ

ハレの舞台が、博覧会がなくなったことにより、上野の山と広小路に固定された。ケのアクティビティが大きな広がりを見せた。



図 20 戦前のアクティビティ

ルート・風景描写

横光利一「旅愁」より

博物館のみを目的とし、それに向かう際の風景描写の中で、上野が山としてではなく、博物館単体が非常な注視を持って意識されていることが読み取れる。

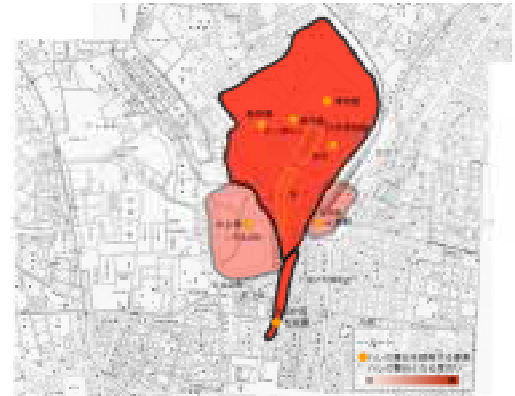


図 21 旅愁のルート

第5章 戦後のまちとの新たなにぎわい

5-1 公園内の空間構造

昭和 31(1956)年、上野駅の公園口が開設され、人の流れが変わった。また、昭和 34(1959)年の国立西洋美術館、昭和 36(1961)年の東京文化会館創設に伴って、既存の軸に直交する軸が顕在化した。不忍池北側は動物園西園となり、閉鎖された。



図 22 戦後の上野公園

5-2 まちの変遷

昭和 20(1945)年、終戦とともに、上野の闇市ができた。これをもとに、昭和 21(1946)年、アメヤ横丁商店街ができた。昭和 25(1950)年、広小路の露店が撤去され、昭和 26(1951)年、上野百貨店と広小路センターがオープンした。

続く昭和 30(1955)年、松坂屋のビルが新築した。また、昭和 34(1959)年、赤札堂も 6 階建てとなり、この頃から広小路に高層化したビルが目立つようになった。



図 23 戦後のまちの主な施設

5-3 人々の行動

表 3 戦後の文学

名称	著者	名称	著者
焼跡のイエス	石川淳	ガンバルおじいさん	金津武夫
畸形の天女	江戸川乱歩他	ちんちん電車	獅子文六
宇宙怪人	江戸川乱歩	下町の女	平岩弓枝
鉄人Q	江戸川乱歩	上野坂下あさくさ草紙	福島泰樹
鷺亭金升日記	鷺亭金升	人間嫌い	正宗白鳥
怪奇を抱く壁	角田喜久男	哀しい予感	吉本ばなな

アクティビティ

上野の山に強いハレの舞台を誘発する要素が残された。ハレのアクティビティは、戦前まちに出て行ったものが再び上野の山に大幅に回帰した。

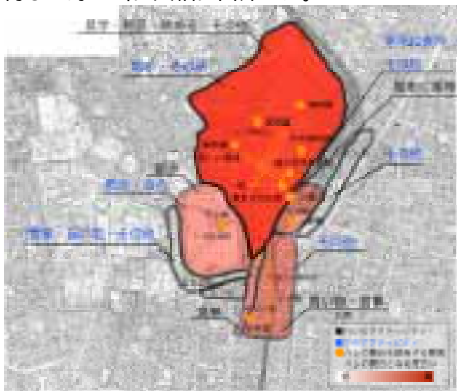


図 24 戦後のアクティビティ

ルート・風景描写

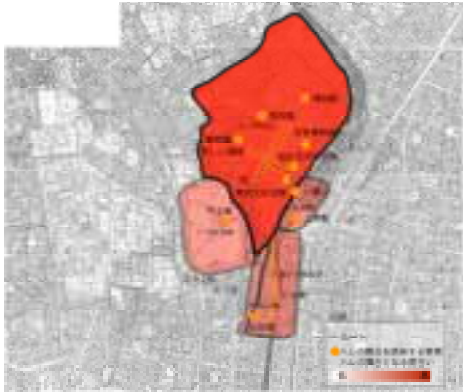


図 25 哀しい予感のルート
吉本ばなな「哀しい予感」より
主人公は、公園内に点在する建物を頭の片隅に意識す

るに留まり、公園を通過している。この風景描写から、もはやそれぞれの建物が、個々で選択的にハレの舞台として完結している状況の片鱗を読み取ることが出来る。

第 6 章 結論

ハレの舞台としての空間の継承と変質

1：上野の山

江戸時代、寛永寺の境内であった上野の山は、明治以降博覧会場として利用されるが、期間限定のハレの舞台という性質は継承された。その後、戦前において、科学博物館等の施設が固定化されるようになり、戦後になると、様々な文化施設が独立して立地するようになった。

2：上野のまち

門前町として寛永寺に付随して形成され、ハレの舞台としても上野の山と一体であった上野のまちは、明治以降、博覧会の開催や鉄道の開設等の影響を受けながら、駅や勤工場等それ自体で独立したハレの舞台を持つようになった。戦前、戦後にかけて、ハレの舞台としての商業空間が多様化していった。

ハレのアクティビティの変化

江戸期において、寛永寺境内と門前が一体となった空間で、参詣や花見等、多数の人々の期間が限定のほぼ単一のアクティビティが発生した。

明治以降、期間限定の博覧会の開催によって、江戸期と同様のハレのアクティビティが継承された。

戦前から戦後にかけて、山においては施設が固定化し、まちにおいては、駅やデパート等ハレの舞台が多様化する中で、個人が状況に応じて選択できる、ハレのアクティビティが生まれた。

ハレとケのうつろい

江戸期において、ハレの舞台と期間が限定されていたことで、ハレとケは明快な変化が見られた。

明治期において、博覧会によって、江戸期と同様にハレの舞台と期間が限定されていた一方、上野の山が常時公園として開放されたことにより、ケの空間としても利用されるようになった。また、まちにおいては、期間の限定されない勤工場等の商業施設が立地することで、ハレとケが常時併存する状態が生まれた。

戦前、戦後にかけて、常時開放された上野の山において、科学博物館等の施設が固定化し、多様化したことにより、ここでも、ハレとケが混在する状態が生まれた。

まとめ

上野のにぎわいの本質は、寛永寺と門前町という、山とまちが一体となった空間構造を由来としながら、日本的なハレの質が近代以降の都市形成において、空間とともに分化し多様化する中で生み出された、ハレとケの混在にあると言える。

また、都市においてにぎわいを創出する為には、選択可能なハレの場を地域に分散的に配置し、多様なアクティビティの絡み合いを創出していくことが有効であるという示唆を得ることができた。

主な参考文献

上野繁昌史編纂委員会[1963]「上野繁昌史」上野観光連盟
上野繁昌史(続)編纂委員会[1968]「上野繁昌史続」上野観光連盟
小林安茂[1980]「上野公園」東京公園文庫
佐藤晶[1977]「日本公園緑地発達史」上・下巻」都市計画研究所
末松四郎[1981]「東京の公園通誌上・下」東京公園文庫
関秀夫[2005]「博物館の誕生」岩波書店
台東区史編纂専門委員会[2002]「台東区史 通史編 各上・下巻」技報堂
東京都建設局公園緑地部[1995]「東京の公園 120 年」東京都公園協会
東京都公園協会[1996]「上野公園ものがたり」東京都公園協会